○教育の力は偉大なり

Ｈ２に 92%の日食が起きた時、新聞に「昼が夜に変わる。しかし、この世の終わりではない。」というタイトルの記事が載り、とても驚いた。

アマゾンには、古い言い伝えがあった。

「悪の使いであるドラゴンが太陽を飲み込んでしまうと、この世は終わってしまう。それで、飲み込んだ太陽を吐き出させるために、ナベ等身の回りにあるものを手当りしだい叩いて大騒ぎをしてドラゴンを驚かす。そうするとまた、平和な世の中が戻ってくる。」

昔話のような話だが、田舎に住んでいる年老いた人々の中には、このように信じている人が少なくなかった。

「この日は、孫たちを朝から川で水浴びをさせ、その後、外へは出さない。家の中で、早く寝かせてしまう。もし、この世が終わってしまうのなら、寝ているうちに終わってしまってほしい。」と語った老婆がいた。

日食を観測する人が多く訪れている町では、その町の長がラジオで日食の起こる訳を説明し、日食の時に起こる太陽の音を記録できるように騒がないでほしいと住民に訴えたそうだ。

数十年前の日系移住者の中にも物を叩いたり、爆竹を鳴らしたりして大騒ぎした経験がある人がいたそうだ。

科学が進歩した時代でも、教育を受ける機会が少ない土地にはまだこのような話が残っていた。正しい知識でいわれのない迷信等を払拭し、主体的に行動する力を育てるには、教育の力しかないと確信した出来事だった。

○母なる川アマゾン

アマゾン川は、例えようもないほど大きな川だ。大西洋に注ぐ河口にあるマラジョ島は九州位の大きさで、川幅は 250km もある。中流でも２～３万ｔ級の大型船も出入りし、海のように 360 度見渡す限り水平線が見える所がある。標高差があまりないので、ゆったりと流れる。

鏡面のようなアマゾン川の川面

マナウス付近でネグロ川とソリモエス川が合流して、アマゾン川となる。ネグロ川の水は茶褐色で温かく、ソリモエス川の水は白っぽい黄土色で冷たく、比重も違い、何 km も混ざり合わずに流れていく。ちょうど、コーヒーの中にミルクを注いだ感じだ。２つの川の合流点で両方の川の水を交互に触ってみると、温度の違いがよくわかった。

合流点で混ざり合わない二つの川の水

町中を遠く離れジャングルに奥深く入っていくと、発電設備もなく自然の真っただ中で生活している人々がいる。魚を取り、乾季になって現れるバルゼアとよばれる肥沃な土地で半年の間作物を作り、川の恵みを受けている。

川に浮かべたいかだの水上家屋に生活する人もいる。彼らは、飲み水、洗面、炊事、洗濯、シャワー、トイレ、交通などすべてを川に支えられている。アマゾンの川は母なる川なのだ。

生活すべてを支える川（撮影前には人がいた）

水辺の家屋（フローティングハウス）

しかし、このアマゾンの自然も危機に瀕していた。「地球の肺」と呼ばれるアマゾンの森林の乱開発、金の精錬に用いる水銀による有機水銀汚染などはマスコミでも大きく取り上げられ、世界中の関心を集めていた。

大資本による大規模な開発には目を覆うものがあるが、ブラジル政府は個人がジャングルを切り開いて畑を作ることをも厳しく制限していた。

アマゾンの土地は砂地または粘土質でやせているため、畑を作るためには切り開いて焼き畑を作らなければならない。これは、どこの国もこれまでに行ってきたことだ。

ところがそれらの国は、自分のところの自然が乏しくなってきたからといって、よそのことにまで口出しをするようになってきた。

ブラジルという国は激しいインフレで経済的には厳しい国だ。ジャングルを切り開くことを取り締まることはできても、そこに生きる人々の生活を保障するまでには至っていません。アマゾンの大自然の中で生きている人々は、たくさんいる。「自然を大切にしろ」と口を挟むよりも、まず資金援助や技術協力をやってほしいと願わずにはおられなかった。

○日本人気質

ブラジルでは、「日本人はまじめで勤勉で約束をよく守る」と評価されているようだったが、反面、堅いというか融通性に欠けるという面もあるとも言われていた。

マナウスからアマゾン川の 2000km 下流のベレーンまでの１週間の船旅の途中に、船の機械にトラブルが生じて止まってしまったことがあったそうだ。

ヘッジ(ハンモック)は、船旅の必需品

修理にはかなりの時間を要したそうで、乗り合わせていた日本人は「予定が狂ってしまう」などとブツブツ文句を言っていたそうだが、他の国の人々はさっそく水着に着替えて船の回りで泳ぎ始めたそうだ。そして、出発の合図があるとさっと上がってきて何事もなかったかのように旅を続けたということだ。

この話は、日本人らしさの一面をよく表しているような気がする。現在、日本は技術や経済において世界のトップに位置しているようだ。しかし、ともすると日本製の世界地図のように「日本は世界の中心である。」という錯覚に陥ってしまうのではないだろうか。ブラジルで見た世界地図では、日本は東側、つまり一番右端に描かれていた。

ブラジルでの世界地図(日本は極東に位置する)

日本を知らない人もたくさんいた。けっして、世界中の人が「日本を世界の中心だ、世界のリーダーだ」と見ているわけではない。技術やお金＝人間性ではないのだ。

ブラジルでは、「アキ　エ　ブラジル（ここはブラジルなんだ）」という言葉があった。「郷に入っては、郷に従え」ということだろうか。

○日本人としての誇り

研修で同僚の先生たちとリオ・デ・ジャネイロに行った折、ブラジルの民俗芸能（サンバショー）を見に行った。

司会者が各国の有名な曲を流しながら観光客を順に紹介していき、客は大きな歓声で自分たちの存在をアピールした。日本の番では「さくら　さくら」の歌が流れ、司会者が日本人の顔の特徴を仕草で表現した。

すると、先輩の先生が突然「日本人を馬鹿にしている」と、怒りを露わにして席を立って行った。

私は理由がわからないまま、後を追いかけた。彼はマネージャーを呼び出して、激しい口調の英語で抗議を始めた。私は乱闘騒ぎになりそうな時には止めなければと側で成り行きを見守ったが、幸いに抗議だけで終わった。

後で尋ねたら、「司会者は、日本人の目が細いというように表現したが、これは日本人を侮辱する行為である。ほとんどの日本人はこのことに気づかず、ただ笑っているだけである。自分はそのことを知っていたので、憤りを感じて抗議した。」とのことだった。

私もわからずただニコニコしていたし、たとえ侮辱されていると感じ、怒りを覚えたとしても、それを表現する術を持たなかった。

日本人は、微笑むことが得意だと聞く。これは長所ともとれるが、自分の意思をはっきり表示しないあいまいさという短所を持っているということでもある。どのような状況でも、日本人としての誇りを失ってはいけないということを教えられた衝撃的なできごとだった。

○日本人の姿

アマゾン川流域には、我々のような派遣者以外にも日本人がおられた。Ｓ20 年代後半、戦後の不況下から一旗揚げようと新天地を求め、南米の各地へ移住した日本人だ。

移住者の中には熊本県人が多く、当時の様子を詳しく聞くことができた。最初は「ああ、そうですか。」と返事していたのが、熊本県人とわかると「ああ、そぎゃんですか。」に変わっていった。

羽釜(はがま)、蒸篭(せいろ)、鍬(くわ)、五右衛門風呂等を持参

当時、日本から１ヶ月もの船旅の先に待ち受けていたのは、赤道直下で気温 35℃以上、湿度 80%以上の気候が１年中続く厳しい熱帯雨林気候、耕地として割り当てられたが農業には適さないジャングル、慣れない言語や生活習慣や食べ物・・・。

ある方は、入植して１km×２km の土地を得たが、起伏のあるジャングルだったため、とても耕作地にならないとショックを受けたそうだ。整地に多大な労力がかかり、地力を高めるため養鶏を始め、鶏糞を投入していった。作物が作れるようになるまで、10 数年かかったそうだ。

道路は舗装されておらず、大雨で道路が荒れたり崩れたりすると交通が遮断され、みんなでトラックを押し上げなければならなかったということもよくあったそうだ。

未舗装で水たまりが多い土の道

開墾途中にマラリアに感染しても満足な治療を受けられず、症状が比較的和らいだ時に起き上がって働き、また寝込むということの繰り返しだったそうだ。

持参した金や食糧は底を尽き、想像を絶する苦労の連続のため、脱耕（耕作地を捨て去る）が相次いだそうだ。

私はマラリアに感染しても、入院してきちんと治療を受けることができた。それにも関わらず、死を覚悟するような苦しみを味わったのだ。その経験から移住当時の苦しみを少しは思い浮かべることはできるが、満足な治療も受けられなかった先人の苦しみは想像を超える。

移住時の苦労や困難を乗り越え、日本人としての心と誇りを大事に生きてこられた姿は、まるでタイムカプセルを開けたようで、忘れかけていた日本人の姿を思い出させてくれた。

一方、日本人は几帳面ではあるが融通が利きにくく、外部の人間に対してよそよそしく排他的な冷たさを持っているようにも感じる。特に現代の日本人社会では、そう感じる。私もその一人だが。

ブラジルはアミーゴ（友人）の世界という感じで、初対面でも旧友のように優しく包み込んでくれる温かさを持っている。ジャングルの奥地にある雑貨屋には、「明日は掛売ができる」というほのぼのとしたユーモアのある掛札が下がっていた。さしずめ、日本なら「掛売お断り」というところだが。

日本人としての誇りを持つことは大切だが、それが高くなり過ぎておごり高ぶってしまってはいけないと諭されたような経験をたくさんすることができた。